

発行者
富山・ミラノデザイン交流倶楽部
高岡市オフィスパーク 5
社団法人富山県デザイン協会内
TEL.0766-63-7140

デザイン祭り—ミラノサローネ

6日間に渡る世界的デザインイベント、第48回ミラノ国際家具見本市(通称ミラノサローネ)が幕を閉じた。私がミラノに移住した1994年以降、毎年拡張していくこのイベントの動向を見てきたが、今年の規模の大きさと内容の豊かさには非常に感嘆するものがあった。5月4日付けの公式発表によると、ミラノ見本市会場への参加企業数2723社(内、外国企業911社)、20万2350平米に及ぶ会場内のブースはすべて埋まり、さらにウエイティングリストには491社の名が連なった。また、入場者数は業界関係者と一般客を合わせて計31万3385人(前回ユーロルーチェが併催された2007年比14%増)、ジャーナリスト5385名となっている。この内、半数近くの15万3456人は151カ国から来訪した外国人であり、サローネの国際性を表している。厳しい経済状況の下、犠牲を払って参加した各企業への報いは充分にあったようである。

ミラノサローネと呼ばれるこの展示会は、ミラノ見本市会場(ロー市所在)と、本会場の外で同時に開催されるフォーリサローネの2つの展示会で構成されている。本会場はブース内で製品を紹介するビジネス主体の展示である。今年は、家具見本市に加え、ユーロルーチェ(照明器具見本市)が開催された。同会場内には12年前より、サローネサテリテと称された35歳以下のデザイナーたちを対象にした展示スペースが設置されている。一方、フォーリサローネは、ミラノの市内に点在するショールーム、ギャラリー、旧倉庫や工場跡などのレンタルスペース内で行われる創造豊かなイベントであり、業界外の一般客が身近にデザインに接する事ができる1年に1度の機会である。

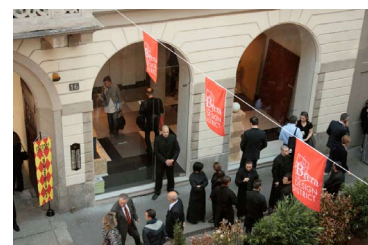
ミニマリズムからの脱出

2000年に入って以降、デザインの傾向は方向性を失い、過去のデザインのリメイクやミニマリズムに流れるなど勢いを失っていたが、今年は各社それぞれが創造力を結集し、新製品のデザインの斬新さはもとより、展示プロジェクトにハイテクノロジーやアート性を組み込んだ空間デザインを披露した。

今年のサローネにおいて新作発表されたデザインは、大きく分けて3つのカテゴリーに分かれる。1つは、「グリーンデザイン」。エコロジーを軸に、再利用、リサイクル、環境保護そしてエコロジー支援などをキーワードにしたデザイン。2つ目は、「エンジョイデザイン」。物の機能に生活を楽しむ感覚や皮肉を付加したデザイン。3つ目は、不況ともエコロジーとも無縁な「ラグジュアリーデザイン」である。ハイクオリティーの素材と技術を用い、芸術性の高いトータルなライフスタイルを提案している。



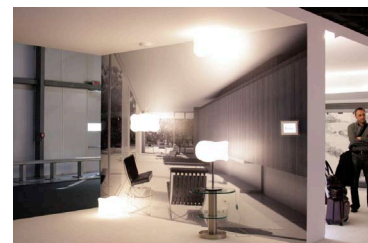
初日4月22日午前9時半、ミラノ見本市会場へ入場する多くの来場者の波。



Brera Design Districtにて、オープニングパーティに集まる招待客たち。



サテリテ会場にて、今年のイベントのテーマは「空気、土、水、火」。



ユーロルーチェにて、ブースの空間演出から各社のコンセプトが伝わる。



トルトーナTVスタジオ、ここからデザイナーのインタビューを発信する。

グリーンデザイン

環境破壊が進む昨今だが、今年も自然を労るデザインが多く出品された。

トルトーナ地区に充満した数多くの展示の中で、俄然注目を浴びていたのが、MoreWithLess社のエコハウスである。簡単に説明すると移動可能なプレハブ住宅なのだが、モジュールを用いた空間設計にデザイン性の高い内装で、快適な居住空間を提案している。設置される場所の気候と環境に対応したソーラーシステム、ウォーターリサイクル、断熱構造などが標準装備されており、人が自然と一体化した生活を送ることをコンセプトとしている。

ミラノ国立大学のキャンパス内では、INTERNI誌主催、ミラノ市後援により「InterniEnergiesDesign」と題したイベントが行われた。2015年に開催予定のミラノエキスポのスローガンである「命にエネルギーを」に則したイベントである。デザインの持つ創造力とイノベーションが、エコロジー支援に与える相乗効果を狙ったイベントである。「未来のエネルギーに関心を寄せるという事は、いかに文化に感動できるかという事である」というコンセプトのもと、多くのアーティストが「エネルギー」を題材にした作品を発表した。同時に、ミラノ市はミラノサローネの期間中に来場者がより快適に展示会場間を移動できるようにと、市内に点在するバイクシェアリングの利用時間帯を深夜2時までまでに延期し、エネルギー節減に寄与した。

この他、プラスチック製品を扱うGuzzini社は、これまで販売前に破棄されていた不良品を溶かし、カラフルなこのプラスチック素材を再利用した一連の艺术作品「NUMERI ZERO」を発表した。

照明器具を扱うLUCE PLAN社は、省エネランプシェード「HOPE」を発表。数枚のポリカーボネート製の薄いフレネルレンズを球状に組み立てることで、光源が発するわずかな光量を拡散、拡大するシステムである。

この他、電気の消費が少ない光源LEDを用いた照明器具の新作の数々や、オープンエアを楽しむためのファニチャーなど、様々な方向からエコロジー支援、自然回帰の提案がなされた。

エンジョイデザイン—サテリテから受ける刺激

今年で12年目を数えるサテリテは、167のブース内に36カ国から集まった702名のデザイナーと世界各地から22の大学が作品を展示した。製造メーカーとのコンタクトをつかむ事が若手デザイナーたちの主な目的であり、出展作品はどれもプロトタイプなのだが、数年前に比べどの作品も非常に完成度が高い。デザインの主な傾向は、「こんな物があればいいな」というデザイナー自身の素直な願望を形に表した作品と、生活をエンジョイするツールに分かれる。若手ならではの柔軟な発想から生まれた作品の数々は、デザイン領域がこれからも拡張していこうという無限性を感じさせてくれる。

昨年に続き今年も多く日本人デザイナーの出展が見られたが、中でも日本国外で活動しているデザイナーの作品が目をつけた。日本人独特のディテールをきちんと押さえる繊細な感覚に、デザイン活動を行なう国の風土がミックスされ、どの作品も新鮮な印象を与える。



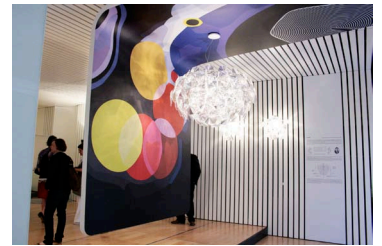
4点展示されたMoreWithLess社のエコハウスの1つ、海辺に適した設計。



Interni Energies Designのオープニングパーティーは、深夜まで続いた。



再利用されたマテリアルを用いて制作されたGuzzini社のNumeri Zero。



LUCE PLAN社の新作HOPE。発売に至るまで3年間、研究開発が行なわれた。



ミラノで活動する大城健作氏のブース、竹細工のランプシェードが美しい。



ヘルシンキで活動する三宅有洋氏のブース、LEDを使用した卓上ランプはDesignReport Awardにノミネートされた。

毎年、展示作品の中から1点最優秀作品としてDesignReportAwardが与えられるが、これまで2人の日本人デザイナーが受賞、今年は2点がノミネートされた。

ラグジュアリー・デザイン

トータルリビングを提案する3大家具メーカー、PoltronaFrau社、CASSINA社、Cappellini社は、見本市会場、トルトーナ地区、旧市街に位置するショールームの3カ所で共同新作発表を行なった。ショールームでは、壁面一杯に広がるロココ様式の絵画を背景に、ピエーロ・リッソーニ氏、Nendo、アレッサンドロ・メンディーニ氏、ジャスパー・モリソン氏らの新作がコンテンポラリーな室内装飾品とコーディネートされ、時代を超えた優雅な空間が作り出された。

ハイクオリティのシステムキッチンとサニタリーを扱うBoffi社は、ブレラ地区のショールームにて、新製品へビデオインスタレーションを投影するなど、シンプルで質の高い製品とコンテンポラリーアートの融合空間を生み出した。

スワロフスキー社は、ユーロルーチェ並びトルトーナ地区近接の旧倉庫内において今年で7年目を迎えるエキシビジョン「Crystal Palace」を開催した。建築、現代アート、デザイン各界から選ばれたクリエイターがクリスタルをテーマにインスタレーションを創作するこのシリーズで、今年アリック・レヴィ氏による「Osmosis」と題した作品を披露した。自然光を遮った天井の高い空間の中に、大理石やワイヤーなどの素材を用い様々な視点から解釈したダイヤモンドカットが展示された。会場の奥には、大型パネルにコンピューターグラフィックにより制作されたダイヤモンドカットの映像が投影され、来場者が床に示されたエリアで体を動かす度にこれらの映像が変化するインタラクティブデザインが設置された。

この他、トルトーナ地区の一角では、最新テクノロジーを起用しリラックス空間をトータルに提案するSPAデザインが周囲の喧噪に一線を引いていた。

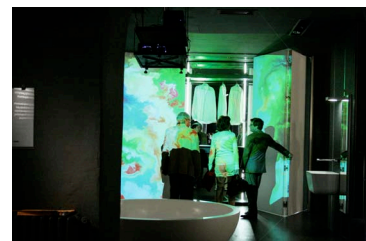
ジャパndeザインの侵攻

ここ数年、イタリアのメディアから日本企業、日本人デザイナーへ大きな関心が寄せられている。INTERNI誌が制作し、YouTubeのサイト上に掲載されたデザイナーたちへのインタビューでは、パオラ・ナヴォーネ女史らと並び深澤直人氏がトップで紹介された他、RIN Chair(フリッツハンセン社)をデザインした紺野弘通氏、サテリテに出展した根本崇史氏、武藤努氏をはじめとする若手デザイナーたちが雑誌、ウェブサイト上で紹介されている。フォーリサローネに出展した日本企業は、トヨタ自動車、ヤマギワ株式会社、パナソニック・エレクトリック、日本産業デザイン振興会、キャノンなどである。

ヤマギワは、旧市街のメインストリートに面する歴史的建築物内、中一階のスペースVito Nacci内に展示スペースを設置し、日本未発売の新作とすでに発売されている製品との2つのセクションで展示を行なった。雪のように真っ白な空間で統一される中、LED、ハロゲン、白熱球、蛍光灯と各種の光源がそれぞれの光温度を放ち、ホワイトトーンに抑揚を与える。20点近くの新作は各々が強烈な個性を誇示しているが、中でも独特のオーラを放っていたのは堀木エリ子



ピエーロ・リッソーニ氏デザインのCASSINA社の新作テーブル。



Boffi社の新製品、クローゼットに投影されるビデオインスタレーション。



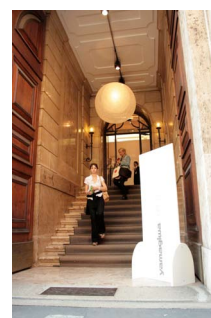
スワロフスキー社のCrystal Palaceには様々なダイヤモンドカットが陳列。



パオラ・ナヴォーネ女史がプロデュースしたRichar Ginori社の「TASTE」。



根本崇史氏の作品、室内の中心に設置される事を想定した、ピラミッド型の収納家具。



旧市街で開催された、ヤマギワのエキシビジョンへの入り口。

女史の「UNIKAKU」。縦線が引かれた和紙を成形した2つのパーツの間に、透明ガラスを挟み込む事でテーブルの機能を付加した照明器具である。和紙を用いながらも「和」から離れたアーティスティックで無国籍なフォルムが印象に残った。

トヨタ自動車は、パーマネントミュージアムにおいて今年で5回目となるLEXUSのエキシビジョンを行なったが、この他、フォーリサローネのメイン会場間を運行させるシャトル便として、去年の秋イタリアで発売開始された小型車IQを20台提供した。渋滞したミラノ市街で小回りの利く小型車が短時間で会場間を移動する間、ドライバーが乗り心地などを説明するという、気の利いたデモンストレーションである。

日本産業デザイン振興会主催により、ミラノトリエンナーレで行われたJapan DesignとJapan Design Selection(グッドデザイン賞受賞作を中心に約70点の作品を展示)は今年で3回目になる。イノベーションとトラディションの視点から選ばれたハイクオリティーな日本製品が一同に紹介された。中でも多くの注目を浴びていたのがKDDIが展示した「ガッキト ケイタイ」などの携帯電話(コンセプトモデル)である。同会場内では、キャノンの立体映像空間「NEOREAL」が展示され、一般客の興奮を駆り立てた。

アートとフォーリ・サローネ

数ある見本市の中でも、ミラノサローネが世界的に注目されている理由として、フォーリサローネの存在が挙げられる。フォーリサローネは誰もが参加できるシステムだが、その来場者数と国際性を基盤に、宣伝効果を狙ったイベントの数は今年約400に達した。特にイベントが乱立するトルトーナ地区では隅々に至るまでスペースが全開し、延々と続く迷路のような空間を前に絶句するほどである。

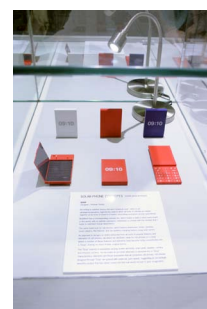
今年で20年目を迎えたフォーリサローネだが、当初よりイタリア国内外の新進アーティストが一般客をも対象にして作品を発表できる大変貴重な機会となっている。特にブレラ美術学院周辺地区では、メーカーショールームに混じりアートギャラリーが点在するが、デザイン領域とは一線を画し、手の温もりや思想といった人間の営みの原点を感じさせるエキシビジョンは、フォーリサローネに大きな厚みを与えている。

毎年、独自のコンセプトでイベントを企画する家具メーカーMOROSO社は、アフリカの文化と伝統、マヌファクチャーを支援し、これらが今後の人類文化遺産として発展する事を願い、ステファン・バークス氏により空間演出されたエキシビジョンを行なった。現在のアフリカを語る写真の数々、アフリカ全土で受け継がれている伝統的な編みの技術を用い西洋のクリエイターによりデザインされ、そして現地の職人たちの手によって制作された家具、アフリカの伝統的な布地でリデザインされたMOROSO社の既存の製品など、デザインとアートが見事に融合した展示であった。

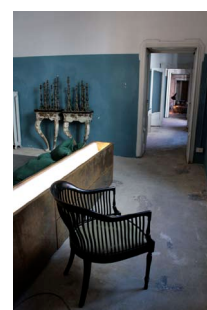
クリエイション活動の実験場を提供するミラノサローネが、これからもビジネスから一歩離れ、世界に向けて意義のあるメッセージを発信することを願いたい。



ミラノトリエンナーレ内に展示された、トヨタ自動車の小型車IQに試乗する来場者。



Japan Design Selectionに展示されたKDDIの携帯電話。



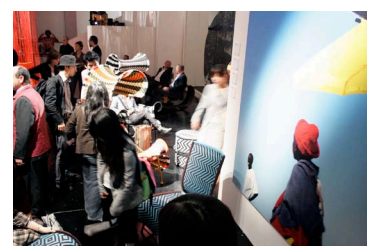
「住居の部屋」と題された、イタリア人アーティストによるインスタレーションは、ブレラ地区にある住み手のいないアパートメントで行なわれた。



若手アーティストをプロデュースするギャラリーW OZZUPでは、「7つの悪徳」と題するエキシビジョンが行なわれた。ミケーレ・オルマス氏の作品「嫉妬」。



2007年大晦日に逝去した、エットレ・ソットサス氏の回顧展。



MOROSO社のショールームには、原色に彩られた家具と、フォトインスタレーションが溢れる。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

1994年よりミラノ在住

主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる

設計外に携わったプロジェクトとして

”do it jubunde”展(無印良品、ニコレッタ・ブランズィとのコラボレーション)を企画ならび実現

”Soundesign”展(Marangoniファッションスクール主催)にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌”ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

現在はクリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動しながら、デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳に携わっている